

邪見憍慢悪衆生

正信偈に曰く

弥陀仏本願念仏 弥陀仏の本願念仏は

邪見憍慢悪衆生 邪見憍慢の悪衆生

信樂受持甚以難 信樂を受持すること、甚だもって難し

難中之難無過斯 難の中の難、斯れに過ぎたるはなし

本月の『遺教経』の講話は、憍慢に対する世尊の御戒めであるが、聖人もまた正信偈に『大無量寿経』の意をとつて厳しく、邪見憍慢悪衆生が、絶対他力の妙法、如来本願の大信心を獲得することは、難中の至難であることを教えられた。

『大無量寿経』には、

「憍慢、弊、懈怠は、もつてこの法を信じ難し。」

と説かれてある。弊とは弊悪で、聞きよしの悪いことである。得手に聞いて勝手にさとするものや、み教を曲げて聞く者などのことである。弊の字は「やぶれる」という字であり、「つかれる」という文字である。疲弊とか、弊困とか言えばつかれ苦しむことであり、弊害、弊風、時弊、弊習等は皆悪いならわし、よからぬことを現わした言葉である。憍慢が高ぶつた相であれば、弊は卑下して暗くなつた相でもある。順境に弊悪であることも、同一なるものの現われである。憍慢で教えの前に頭を下げないのも、弊悪卑下して、教えを正しく領解しないのも同じである。

『菩薩処胎経』には、

「西方、この閻浮提を去ること、十二億那由他に憍慢界あり、国土快樂なり……阿弥陀仏国に生ぜんと欲する者、皆深く憍慢国土に染着して、前進して阿弥陀仏の国に生ずること能はず、億千萬衆、時に一人ありて能く阿弥陀仏の国に生ず。何をもつての故に、皆憍慢にして、執心牢固ならざるに由つてなり。」

考えさせられる経文ではある。憍慢国は、楽しい国である。その楽しさに執着して、そこにとどまつている。前進して阿弥陀仏の国に至る者は、億千万人中、時に一人ありとは、全く驚くべきである。

憍慢国！懈は懈怠で、精進せずなまけること、慢は憍慢である。憍慢なるが故に懈怠する。頭が高いからなまける！まことに一言金鉄、人間の心に巣くうて、暗にとどまらしむる唯一の原因を道破して余す所なしである。

憍慢国にも喜びも快樂もある。その甘味を貪つて進まないのである。いわゆる、真宗の同行の大方がこの憍慢国にとどまるのではないか。「それほど求道精進を言わなくても、極楽へはこの身このまま参られる。」「そんなに言われても、理屈と實際は違う。理屈通りにならないのを救うてもらふのだ。」「あゝ有難い、このままが有難い。」「そうした言葉で、一道精進の信力なく、雪降る廣野を歩みきらねばならぬ現実におかれであるのに、暖かい炬燵に入ったような様子で楽しんでる。しかし悲しいことは、そこには仏法僧の三宝がない。」

自分をぬきにして、頭だけの戯論を弄んで、得々として人を見返しているのは僞慢である。仏教では、自分そのものをぬきにして、暇のある理屈をこねまわすことを、戯論として嫌はれる。

しかし、自分をぬきにしての学問沙汰が僞慢の種であるばかりではない。

学問や理屈がいるものかと、ただ感情の陶醉から起とうとしない者もまた、その心の底には懈慢国に通うものを持っている。こうした「味の屋」もまた、真実には、誰の前にも頭を下げない。そして進んで、阿弥陀仏国に入る千万億中の一人ではない。

慢心について、『俱舍論』の中に七慢の説がある。

- 一、慢。劣つた人を見て彼は劣っている、我は勝れていると思ひ、同等の人を見て、己れと等しいと思う。丁度いいようであるが、その心に自分を挙げたい心があるから、慢と言われる。
- 二、過慢。自分と等しいものを見て、己が勝れていると考え、勝れた人を見て、自分と同じ位だと考える心。
- 三、慢過慢。他人が自分よりも勝れているのに、劣つた自分をそれよりも勝れていると思ひ上るものを言う。
- 四、我慢。我あり、我が所有ありと執して高上がりすること。
- 五、増上慢。未だ聖道を修せず、徳なきにかかわらず、己はすでに証得したと言うもの。
- 六。卑慢。他人と自分とでは、比較にならぬほど優劣があるのに、少し位しか劣つてはいないと思うこと。
- 七、邪慢。悪行を成就し、悪を恃んで高上がりすること。

悪党は大概邪慢である。悪行をもつて人を恐れしめ、自分の思うことを成就しようとする。一寸でも人に嫌な所があれば、毒ついたり、記事にしたりして、人をおびえさし、自分だけ手を振つて通ろうとする。大阪でも、東京でも、京都でも街のダニ狩りがされた。しかし腕にかけての暴力団だけでなく、思想的な暴力団はどこにもはびこっている。否その邪慢は一家の中にすら巣くう。

七慢の説にあるように、人は決して人の下だと思ふことが嫌な動物である。たとえ、自分は劣っていると思つてすら、その心の底にはなお慢心がある。慢心がある間、自分の掛値のない正体の知れようがない。自分の本当の値打ちが知れぬ以上、私たちの正体の上に打ち建てられた如来本願の救いはわからない。ましてや、自分の正体を知らしてくれる人に会えば、鬼になつて火炎を噴いたり、敵にして仇討を考えた人では、救われようがない。自分を、偽でも、お上手でもいい、褒めてくれる人を「立派な人、大人物だ」としていたのでは、忠告する人などはその人の周囲にはなくなる。

聖人が「邪見僞慢悪衆生、信樂を受持することは甚だもつて難し。難中の難これに過ぎたるはなし。」と言われるのは当然である。

怖るべきは慢心である。書物を読むも、話を聞くも、それがことごとく汝の慢心の肥料になったのでは、仏の教えもかえって生死流転の種となる。

慢心は、自分で自分を挙げようとするにかかわらず、それが出れば出るだけ、他人は見下げる。

邪見憍慢はただ仏の道を妨げるばかりではない。世間の道においてもまた汝の恐るべき敵である。

慢心は正体を見せない。

他人に慢心をおさ圧えられれば、瞋恚の炎と変化し、あるいは卑下悲観して自暴自棄する。故に憍慢心の前には落ちつきがない。

仏智によつて静かに己が内心の相をよびさまされ、大慈悲によつて汝自身の真実に帰る時、憍慢は慚愧と転じ、やがて念仏の衆生となる時、信心の智慧は尊重の世界を知つて来るのである。

慢心はそれが募れば募るだけ人を見下す。尊重の心はそれが深まれば深まるだけ、己を低うする。己を低うすると、卑下しているのではない。自らの生活を尊ぶが故に、一切を尊ぶのである。

だが、我等には底知れぬ慢心がある。邪見憍慢の悪衆生とは実に我がことである。我慢のとれたと思う次の瞬間には、また新しい我慢が頭を挙げている。

我慢の角をたたかれて、なおかつ喜び得るのは、念仏の心のみである。

念仏すとも、一生涯ただ負けじ魂だけでおし通す者には、真実の信心はわかっている。信心の世界において邪見憍慢の悪衆生なることを知らされることこそ、救われずてゆく唯一の道である。